

## 中山説太郎の経緯

中山説太郎の祖父は江戸時代に開墾された新田西之浦を支配する成羽藩の村役人として明治維新までは村ではわずか2軒の氏族でした。

説太郎は明治6年9月30日父才一郎の長男として半農半漁の田舎連島町中浜で生まれ武士制度の廃止後一家の生活は楽ではでなかったようです。

16歳で小学校を卒業後、受業生の試験に合格し西浦小学校の教職に従事していました。翌年には一時上京した後大阪に出て北浜の株屋を営む上野さんに奉公する傍ら大阪商業学校（現大阪市大の前身）の別科に通いました。

卒業を期に上野さんのすすめで北浜では全盛の島徳蔵さんが持っている鉱山で働くことになりました。

約5年間支配人格で働いたが報われず、結局100万円位の赤字を出しました。

東山鉱山は久原鉱業に売却されたのです。東山鉱山の説太郎の5年間のデータを見た久原鉱業の社主久原房之助はこの男は見どころが有るのでこのまま働いてみないかと誘われたがお断りした。私は子供時代漁村の近くに住んでいたため魚仕事が好きで、久原さんの兄である田村市郎さんのやっている練漁業の一井組にお世話になることになった。一井組は後に日魯漁業会社となり北海漁場で活躍した。日魯漁業の社長は田村さんで説太郎は専務で働いた。

これが縁となり説太郎は久原房之助さんとの結びつきが出来たのです。

中山説太郎は久原財閥の総帥久原房之助と実兄の田村市郎と信任が篤く、久原鉦業をはじめ日本汽船・日魯漁業・大阪鉄工所・久原商事等々久原財閥の系列会社の取締役となり経営に関与し数々の功績をあげ久原財閥の陰の経営者として世間に知られていました。説太郎が日魯漁業時代でしたが、会社は氷海を航行できる砕氷船を持たなかったものでロシアの業者と太刀打ちが出来ないのです。ロシアの船を買おうと通訳を連れてペトログラードへ行ったのです。ところがロシアは船を売るところか買いたいくらいで売船は一隻ない状況でした。仕方ないので腰をすえて滞在中にロシアの武官からイギリスから銅の輸入が止まっていますと困っていると云う情報を聞いたのでロシアの陸軍参謀総長に会い意向を打診すると二つ返事でいくらでも買いたいと云う。そこで久原さんに銅を大量に買い集めるようお願いしました。この銅の売り込みに成功し久原鉦業はかなりの利益をあげる事になったのです。

かねてから母親が「殿様型の家に住みたい」と云う希望を叶える為建て始めたのがこの頃でした。石垣は連島の石屋が築いても雨が降る度に崩れるので大林組に頼み、技師がきて大阪城にならって生の松丸太を埋めるなどして築き上げました。母屋は連島の大工で、庭は久原さん出入りの三樹園の庭師が何人も来て造ると云う大掛かりなもので、完成まで10年と云う歳月を要したそうです。